

『情念論』の巻頭に四通の書簡から成る序文が付されていることは案外、知られていない。既訳の六冊に当たっても序文は訳出されておらず、省略の理由さえ明示されるわけではない。このような処遇はフランスでも間々みうけられるところであり、定評のある古典叢書版でさえ解題に抄出されるだけで、『情念論』本文にテキストとして組まれない。

そのわけは、二度くりかえされる友人とデカルトとの往復書簡のうち、最初に置かれた匿名の友人の手紙が長文で、しかも「ぎこちなく」（フェルディナン・アルキエ）、「主題から逸脱した」（ブノワ・ティメルマンズ）散漫な文体と評され、軽んじられてきたからである。ところで手紙の書き手がだれなのか諸説あり、匿名の友人という手紙の主は、じつはデカルト本人だという見方（アルフレッド・エスピナス、サミュエル・ド・サシ、ジャン-モーリス・モノワイエ、ステファン・H・ボス、パスカル・ダルシー、ドニ・カンブシュネル）もある。そこで『情念論』書簡体序文全体がデカルトの自作自演の一人芝居である可能性を検討するには、それ相当の議論を要するであろう。

一方、その匿名の友人をデカルト著『哲学の原理』仏訳者のクロード・ピコとする根強い定説（シャルル・アダン、ピエール・メナール、ジュヌヴィエーヴ・ロディス-レヴィス、アルキエ、ティメルマンズ）が採られるとしても、デカルトそのひとが四通の手紙を用いて『情念論』の序文の代わりとするということの、承諾の事実が消えないわけで、却ってその事実は重く受け取られるべきであろう。

以上のことを踏まえて書簡体序文を仔細にたどってゆくと、ボスの指摘するように、たしかに「この手紙の表向きの目的は、デカルトに『情念論』の写しを請うことであり、デカルトを励まして学問上の研究に不可欠な実験をするために必要とされる公衆の援助を得ようと努めることである」（『情念論』英訳と注解、一九八九年、一ページ、注三）とみとめられる。だが、この少々たどたどしい文体のうちに読み取らねばならないのは、「デカルトの学問観の正確な要約」（同前、注一）が展開されているという点であり、さらに紙背に徹すれば、学問と道徳の関係の考察まで示唆されているという点であろう。いいかえると、この書簡体序文の正当な再評価と復権がなされるなら、デカルトの他の著作とか手紙が援用されなくても、この序文そのものに基づいてデカルトの哲学体系のうちに『情念論』を位置づけ、この著作の意図と構成を見通せるようになるのである。

というのも、この書簡に認められる論調はデカルトが定めた「自然哲学全体の基礎…[と]…その基礎から演繹した真理の大きな系列がどれほどのものかについて」（『全集』十一卷三一八ページ）訴えながら『哲学の原理』書簡体序文の参照を促しているだけでなく、『方法序説』第六部と『省察』付録のテキストさえ引用するからである。にもかかわらず「これらの真理が知恵のどのような段階に、生活のどのような完全性に、どのような幸福にまで導くことができるか」（『全集』九卷二〇ページ）という点までこの書簡で正面切って言及されないのは、モノワイエの指摘するように、「道徳という主題について自分の考えをのべることにたいする生来の嫌悪」（『情念論』解題、一九八八年、一二ページ）と新旧両派の神学者の非難を恐れてのことなのであり、架空の友人をでっち上げたのも、回りくどい文体を捏ねあげたのも、デカルトの懸念とためらいの表れであって、その気持ちを取繕う幾分かの含羞さえ書簡体序文の大げさな文体に読み取ることができるのである。

自己肯定としての意志の否定

——ショーペンハウアー哲学における苦悩のアイデアと認識の転換を契機として——

末田圭果（大阪大学）

ペシミスティックで、矛盾を抱えた哲学体系だという旧来の哲学史的解釈を覆し、ショーペンハウアー哲学の整合的解釈が示されて久しい。先行研究では、主著『意志と表象としての世界』（1818）で展開される「意志」や「アイデア」というタームを超越論的に解釈することで、その整合性が担保される。近年では、その解釈の理論的成功を背景に、ショーペンハウアー哲学の生命倫理への応用が模索されている。この超越論的解釈を透過して考察すれば、主著で導入される「意志の否定」の理解にも変更が迫られる。その哲学の要諦である意志の否定は、一見するとあらゆる意欲を捨てること、つまり全てを諦める状態として理解されるように思われる。しかし意志の否定は、超越論的解釈に基づいた場合、すなわちショーペンハウアーの認識論と連続的に捉えられた場合、全ての意欲を手放して苦痛から解放された状態という単純な理解を拒む。本発表の目的はショーペンハウアー哲学の実践面への応用可能性の拡大を念頭に、意志の否定を認識論と連続的に捉えることで、それに主体の自己肯定という積極的側面を見出すことだ。

そのために本発表では、ショーペンハウアーの学位論文『充足根拠律の四方向に分岐した根について』（1813/以下『根拠律』）で展開される認識論を手掛かりに、主著で示される意志の否定を認識論的に、つまり認識の転換の帰結として捉える。その際アイデアが持つ超越論的側面、つまり私たちの認識成立の条件としての側面が明らかにされる必要がある。さらにアイデアの成立の条件として、理性の思慮と意志の想像力の働きについて示す。理性の思慮とは、理性が持つ抽象作用とは区別される理性の働きであり、概念を相互に比較検討する能力だ。また想像力は意志の再現能力である。次に認識の転換とはいかなる事態で、どのように意志の否定に関わるのかを叙述する。認識の転換とは、認識がその制約である個体化の原理を漸進的に免れることで、従来のあり方を徐々に脱することだ。更にそれは苦悩のアイデアが形成されることで可能になることが明らかになる。最後に認識の転換の結果としての意志の否定に、主体の自己肯定という積極的側面を見出す。認識の転換の帰結として意志の否定を位置づけるに先立って、個体化の原理に従う認識と専ら生を希求する、生きんとする意志の肯定の関連が示される。個体化の原理に従う認識は、本来は目的も根拠も持たない意志を、動機を与えることで生へと導いている。それゆえ認識の転換が漸進的に進むことで、従来生存の維持にのみ向けられていた意欲が相対化され、それ以外のことへも意志が動機づけられる。つまり意志の否定の認識論的解釈に拠れば、意志の否定は字義通りの「否定」の意味を失い、生きんとする意志の相対化だと結論付けられる。それは身体を保持しつつ、殊更に生へと意欲が動機づけられない状態であり、意志が自らの根拠の無さを甘受する状態、すなわち自己肯定を意味する。

以上のように解釈された意志の否定は、実践面への応用可能性をより広範に開かれることになる。具体的には、終末期患者に対するケアのプログラム規定に関する理論的支柱として、意志の否定は応用可能である。また認識論的に説明された意志の否定は、認識論を軸にショーペンハウアー哲学を考究し理解を深化させることに寄与する。

滝沢克己とフランクルー意味と超意味をめぐって

雨宮徹（大阪工業大学）

ナチスの強制収容所を生き抜いた精神科医フランクル（V.E.Frankl、1905-97）は、無意味感に苛まれる人々を対象とした心理療法であるロゴセラピー（Logotherapie）を創始した。彼はロゴセラピーが積極的に扱っているのは内在的次元・人間的次元における「意味」（Sinn）についてであって、超越的次元・宗教的次元における「超意味」（Über-Sinn）については、宗教的領域の信仰に属するものとして積極的には扱わない立場を取る。

この点に関して宗教哲学者である滝沢克己（1909-1984）は、フランクルは「意味」と「超意味」を分離してしまっており、それがフランクルの思想を限界づけていると批判をしている。

各々の信仰および人間的次元における行為の理解を明確にすることによって、人生の意味の問題を考えるにあたり、超意味への信仰がどのように位置付けられるかについて考察する。

道徳的責任（moral responsibility）の理由反応性説（reasons-responsiveness theories）とは、大雑把に言えば、ある行為者 S がある行為 ϕ の道徳的責任を負うためには、 ϕ をしない十分な理由がある可能世界の多くで、 S はその理由から ϕ をしないことが必要である、と主張する立場である。例えば、ある人が窃盗癖（kleptomania）である場合、たとえその人が万引きをしたとしても、その人は万引きの道徳的責任を負わないように思われる。理由反応性説によれば、それは、窃盗癖の人は、自分のすぐそばに警察官がいる可能世界のような、万引きをしない十分な理由がある可能世界であっても、万引きをしてしまうからである。このように、理由反応性説は、行為者が理由から行為する可能世界がどれくらいあるのかという観点から、道徳的責任の有無または程度を評価しようとする。道徳的責任に対するこうしたアプローチは多くの哲学者によって支持され、現在では最大派閥の一つとなっている。

ところが、最近になって、スリパダがこのアプローチに対して反旗を翻し始めた。スリパダの戦略はいくつかあるが、そのうちの一つは次のようなものである（Sripada 2019）。まず、スリパダは心理学において古くから研究されているストループ課題（Stroop task）に注目する。典型的なストループ課題では、被験者は、ある色のインクで書かれたある色を意味する文字（例えば、緑のインクで書かれた「赤」という文字）を見せられ、その文字の意味ではなく、その文字の色をできるだけ早く回答するように求められる（この例では、被験者は「赤」ではなく「緑」と答えなければならない）。こうしたストループ課題では、被験者は、きちんと注意していれば、ある程度までは正しく回答することができるが、人間の脳の構造上、どれだけ注意しても、一定の確率で間違えて回答してしまうことがわかっている。

そこで、スリパダは次のような事例を提示する。フェイはストループ課題に極めて注意深く取り組んだ。その結果、フェイが間違えて回答してしまったのは、1000 回の試行のうち 4 回だけだった。しかも、この 4 回の失敗は、人間の脳の構造に由来するものであり、フェイの不注意によるものではなかった。では、フェイはこの 4 回の失敗に関して道徳的責任を負うだろうか。直観的には、負わないように思われるだろう。しかし、理由反応性説に従うと、この直観に反して、フェイは 4 回の失敗に関して道徳的責任を負うことになってしまう。なぜなら、現にフェイが 1000 回の試行のうち 996 回も正しく回答していることを考慮すれば、正しく回答する十分な理由がある可能世界の多くで、フェイはその理由から正しく回答すると考えられるからである。ところが、もしそうであるならば、理由反応性説に反して、行為者が理由から行為する可能世界の多寡は、道徳的責任の有無または程度に直接的には関係しないことになるのではないだろうか。

スリパダが提示したこの事例をストループ型事例と呼ぶことにしよう。本発表では、このストループ型事例を詳細に検討し、理由反応性説を擁護することを試みる。

空手道は中国拳法をもとに沖縄で発展した武道であり、今日では世界中に普及している。全日本空手道連盟（以下、全空連）によれば、空手道の目的は「日々の心身の練磨を通じて強靱な身体を鍛え、人格を陶冶し、心身ともに有為な人物を育成すること」である。したがって、空手道は稽古を通したある種の道德教育を担っているとも言える。

ところが、稽古を通した人格形成について入門者や部外者にとっての有用な情報は少ない。たとえば、全空連は稽古と道德教育の具体的な繋がりを明確には示していない。勿論、「礼に始まり礼に終わる」という格言や上下関係など、稽古で培われる礼儀と呼ばれるものが度々注目される。しかし、これは空手道以外でも培われうる。空手道の道德教育的側面は今ひとつ示されていないと思われる。空手道以外では E.ヘリゲル、近年では照屋太郎が武道による人格形成などに代表される習得者への影響を論じてきたが、主観的記述の面が強く、公共的な側面を注視しているとは言えない。ましてや空手道についての記述などは見受けられない。

本来、空手道だけでなく武道稽古は師範と弟子のやりとりがあって初めて成立するものである。したがって、空手道の道德教育的側面を示すには稽古という営みの公共性に注目する必要がある。本発表は、空手道稽古で公共性が強く見受けられる、技や動きの習得における師範と弟子の関わりに注目した議論を展開する。

まず、空手道特有の動きによる習得者への影響を摩文仁賢栄の説から確認する。空手道の動きは人間と自然が一体化したものであり、特定の非自発的な行為をコントロール可能な自発的行為に変容させて習得される。それにより行為者の主体性が消去され、煩惱から解放された仏教的な「空」の境地に達するための教育的側面を持つ。

次に、いかにして非自発的な動きが自発的な動きになるかを解明する前に、自発的／非自発的行為の区別がいかになされるかを説明する。そのために、L.ウイトゲンシュタインの「自発的／非自発的行為(voluntary/involuntary action)」についての議論を説明項として導入する。彼によれば、自発的行為は、起こるべき文脈で状況で生じた行為という点で非自発的行為と区別される。

しかし、その文脈も変化しうるため、自発的行為と非自発的行為が何であるかも変化しうるものでなければならない。以上から、非自発的行為が自発的行為になるためには、変化が可能である文脈を形成せねばならないことが分かる。そのために、非自発的行為が自発的行為として扱われる範型を「直示的教示(Ostensive teaching)」によって提示する必要がある。直示を受けた者は教示に基づき、自身の語の使い方を確認し、その正しさをチェックするのである。

最後に、上記の議論を総合し、空手道稽古をウイトゲンシュタイン哲学から説明することを試みる。稽古では師範が直示によって空手道の動きの規範を提示し、弟子が師範に言われて要求された通りに動いているか、つまり空手道の動きを自発的に行為しているか、師範が判断する。師範に習得を判断された時、弟子は重力を借りて動き、主体性が消去され、煩惱から解き放たれた仏教的な「空」の境地へと至る基礎が打ち立てられていると言える。

本発表の目的は、ウィトゲンシュタインの主著である『論理哲学論考』（以下、『論考』）に関するいわゆる「決断的解釈（resolute readings）」を、前期ウィトゲンシュタインの倫理思想に焦点を当てながら検討することである。

ウィトゲンシュタインの『論考』はその刊行以来、様々な仕方で様々な人々によって読まれてきた。これらの試みの中で有名なものとして、古くはウィーン学団による論理実証主義的立場などがあるが、近年最も影響力を持っている解釈はコーラ・ダイヤモンドやジェームス・コナントらによって提示された「決断的解釈」である。20世紀末に初めて公表された決断的解釈は、それ以前に主流だったピーター・ハッカーやデイビッド・ペアーズらの解釈を、『論考』の最終部にあるように「はしご」を投げ棄てきれていない臆病な解釈として厳しく指弾し、『論考』の本文はウィトゲンシュタイン自身が書いているように全くのナンセンスとして解されねばならないと主張した。この決断的解釈は多くの支持者を生み、その解釈の妥当性および有益性は、今日でも多くの研究者の議論の対象となっている。

また前期ウィトゲンシュタインといえば、フレーゲやラッセルらの著作とともに今日の分析哲学の起源に位置づけられることもあり、その論理学の哲学や言語の哲学に与えた影響力は20世紀の哲学者の中でも類を見ないものである。その一方で、その倫理に関する言及は、『論考』や『草稿 1914-1916』、あるいは「倫理学講話」などで「世界の意義は世界の外になければならない」といったように、一見すると極めて謎めいた仕方で示されている。このため、命題や論理、科学などに関する彼の諸考察と比べると、彼の倫理に関する成果は、一部の例外を除きこれまでほとんど顧みられてこなかったと言ってよい。

しかし、近年こうした既存の解釈のありようは、大きな見直しを迫られている。ウィトゲンシュタイン自身が『論考』の編集者フィッカーに宛てた手紙の中で、『論考』の目的が倫理的なものであると記していることや、今世紀のウィトゲンシュタイン解釈をリードし続けている、上述のいわゆる「決断的解釈」とそれをめぐる論争の中で、整合的なウィトゲンシュタイン解釈をおこなう過程での「倫理」の位置づけが問われるようになった。また、2018年には決断的解釈の流れをくむ哲学者たちが中心となって *Wittgenstein's Moral Thought* と題された論文集が刊行されるなど、ウィトゲンシュタインの倫理をめぐる研究それ自体もまた盛り上がりを見せている。「倫理は語りえない」といった『論考』におけるウィトゲンシュタインの記述は、多くの人々の関心を引き寄せてきており、これらの研究者の大半は既存の倫理学の手法に対する疑義を呈している。

決断的解釈と前期ウィトゲンシュタインの倫理思想をつなぐポイントは、「治療」というキーワードで表すことができ、後期ウィトゲンシュタインの『哲学探究』由来のこの観念を『論考』へと輸入することが果たして妥当なのかということが問題となるのである。